

# 大津 歴博 だより

慈恵大師1025年御遠忌記念企画展

## 元三大師良源

— 比叡山中興の祖 —

平成22年2月27日(土)～4月18日(日)

2010  
No.78



重要文化財  
絹本着色慈恵大師像  
加古川・鶴林寺蔵



大津市歴史博物館

# 「元三大師良源 — 比叡山中興の祖 —」

慈恵大師・元三大師・角大師・魔滅(豆)大師

良源は、平安時代中期に活躍した天台宗の僧で、比叡山中興の祖として現在も多くの人々に慕われ、崇められています。その功績から「慈恵」の諡号が与えられ、慈恵大師とも呼ばれますが、一般には元三大師が最も親しまれている呼び名で、正月三日に亡くなられたことに由来します。このほかにも、御願大師・角大師・魔滅(豆)大師とも呼ばれ、それぞれに由緒があり、多くの説話に彩られた高僧ということができるとでしょう。

## 良源の生涯

まずその生涯を簡単に紹介しましょう。延喜十二年(九一二)、近江国浅井郡に生まれ、十二歳で比叡山に登り、十七歳で出家。若くしてその才能が認められ、二十六歳の時、興福寺維摩会の論議でその名が知られるようになり、また、そして五十歳の応和三年(九六三)、清涼殿で行われた法華八講で南都の高僧と論議し、名声を博します。こうして比叡山を代表する僧となった良源は、五十五歳の若さで第十八代天台座主となり、以後、永観三年(九八五)に亡くなるまでの十九年間、比叡山の黒柱として活躍しました。

良源の業績としてまず挙げられることは、比叡山の堂舎のほとんどを再建したことです。また広学(こうがく)堅義(けんぎ)といって仏教に関する論議を盛んにし、比叡山の学問を振興するとともに、僧侶の規律を正し、延暦寺の基礎を磐石なものとするために全精力を傾けました。

学問の振興に尽力した良源は、天台教学を担う多くの弟子を育てています。藤原師輔の子弟で良源の後を継いで座主となった尋禪(じゆんぜん)や明救、覚慶、院源、

運賀(うんが)といった良源の弟子が座主を歴任し、「往生要集」を著し浄土思想に大きな影響を与えた源信(げんしん)(恵心流祖)をはじめ、覚運(げつう)(檀那流祖)など、天台教学を興隆させた弟子たちを輩出しています。良源以後、天台教学は本覚思想と呼ばれる新たな思想潮流を作り上げ、この中から鎌倉新仏教の祖師たちが生まれます。最澄の教えを発展させた思想を生み出した原点に立つ僧の一人として、良源を挙げることができるとでしょう。ただ、良源は、自らの思想を著作として残すことはありませんでした。

## 元三大師信仰

良源の超人的な活躍は、権化(ごんげ)の人・応化仏(おんげぶつ)(仏や菩薩が衆生救済のため相手に応じていろいろな身体を現すこと)とも考えられ、観音菩薩の権化と捉えられています。その一方で仏法擁護のため魔界の棟梁となったとか、平清盛は良源の生まれ変わりだとも言われ、人々を救い、仏法を助ける強烈な霊力を持った存在と映ったようです。こうした良源への信仰は、仏法を振興し外敵を調伏する力を持つとも考えられ、鎌倉時代以降たくさんの良源像(彫刻や絵画)が作られました。良源をまつる法会も盛んに行われます。また良源像を摺(すり)って、家の入り口に貼っておくと魔除けになるという信仰も早くから生まれ、現在の「角大師」の札に通じます。また近世に入ると、観音籤と呼ばれるおみくじが盛んになりますが、良源の本地が如意輪観音であったことから、元三大師信仰と一体となり、おみくじの元祖として広まりました。

本展は、良源の千二五五年御遠忌を記念して、現在も多くのの人々に信仰される良源に関する作品を一堂に会し、紹介するものです。

会期：二月二十七日(土)～四月十八日(日)

休館日：三月・八・十五・二十三・二十九日、四月五・十二日



重要文化財 木造元三大師坐像 八幡市・正法寺蔵



木造慈恵大師坐像 京都・法界寺蔵



元三大師縁起絵巻 求法寺蔵



重要文化財 紙本墨画高僧像 京都・仁和寺蔵  
(良源の部分)



## 第八一回 ミニ企画展

# 古文書を楽しむ

平成22年1月19日(火)～3月7日(日)

和紙に墨で、ミミズが這ったような文字が書かれた文書が、旧家の土蔵などに保管(放置?)されていることがよくあります。何が書いてあるのかさっぱり分からない。また、上向きか下向きかも分からない。虫が食べたような穴もある。捨ててしまおうか…。これが古文書の悲しい運命です。でも、そんな古文書も、昔の人が書き残した立派な歴史の情報なのです。捨てる前に歴史博物館にお持ちいただくのも一つの方法ですが、ちよつと勉強されて、古文書の文字の解説に挑戦してみられませんか。古文書解説の講座は、各地の博物館で開催していますが、今回のミニ企画展では、古文書の解説の方法も盛り込んだ、親しみやすい展示にしようと、現在担当者は頭をひねっている最中です。古文書解説の楽しさや基礎を、現物の古文書や写真パネルを使って紹介します。乞うご期待。



町中の道しるべ(部分)

変体仮名(万葉仮名)が刻まれています。さて、なんと読むでしょうか。今回のミニ企画展では、このようなクイズ形式のパネルも展示します。

## 第八二回 ミニ企画展 大津の遺跡シリーズ 8

# 上仰木遺跡

平成22年3月9日(火)～4月25日(日)

大津市仰木にある上仰木遺跡は、平安時代と室町時代を中心とした遺跡です。御所の山で発見された屋敷跡からは多量の土器類や漆器などが出土し、有力者の邸宅跡とみられます。

平安時代の堀跡から出土した墨画土器は、皿をカンバスにみたくて、僧や長刀、女性の顔や姿などを描いています。写真の女性の顔はその一つで、整った構図に、手慣れた筆使いが窺えるものと、稚拙にみえるものが、上下に描かれています。師匠のお手本を見ながら弟子が練習していたのでしょうか。また、上仰木遺跡からは多くの中国産陶磁器が出土したことも特筆されます。質の高い青磁や白磁の類に加えて、磁州窯系の陶器類なども出土しました。緑釉白地搔落梅瓶は大英博物館所蔵のものと同工品といえるもので、わが国の遺跡ではきわめて珍しい出土品です。

今回の展示では、これら御所の山に眠っていた邸宅跡からの出土品について紹介します。



## 企画展「戦争と市民」を終えて

本年七月二十五日(土)から八月三十日(日)までの三二日間(開館日数)、当館企画展示室Aにおいて、企画展「戦争と市民」湖国から平和へのメッセージ」を開催した。本稿は、企画展担当者からの結果報告である。

企画展のタイトルは、当初「大津・戦争・市民」としていた。しかし、展示の準備を進めていくなかで、展示資料や取り扱う情報を大津市のみに限定するのではなく、少なくとも滋賀県全域を対象として戦争の歴史を語るべきではないか、また展覧会の内容も、当然のことながら、平和の大切さをアピールするものであるべきだと思ひ、地域の限定を避けて標記のタイトルに変更し、サブタイトルに、滋賀県を示す「湖国」の文字、そして「平和」・「メッセージ」の文字を使用することにした。ただ、当初から「市民」という言葉を入れていたのは、本展では、主に「銃後」の市民生活を扱うなかで、市民にとっての戦争とは何だったのかを明らかにしようと考えていたからであるが、その点については観覧者からの指摘をいただくことにもなった(後述)。

それはさておき、企画展に先立ち、広く市民の方々から資料を募集しようと考え、四月十五日号の「広報おおつ」に記事を掲載した。また、各新聞社にも掲載をお願いしたところ、ご協力をいただき、多くの紙面に掲載していただいたことから、締切とした五月末日までに、大津市内のみならず県下各地から、実に一〇〇件を超える情報提供をいただいた。企画展の会期が迫るなか、一人でも多くの方とお出合いしたいと思ひ、五月から、企画展が始まろうとする七月にかけて、連日県下を走り回り、約五〇〇点の戦時資料を

収集することができた。紙面を借りて、ご提供いただいた方々に対し、厚くお礼を申し上げる次第である。

また、企画展が始まって以降も、多くの方が、自家に保存されていた戦時資料を博物館にお持ちいただいた。そのなかには、旧大津商業学校(現滋賀県立大津商業高校)野球部出身で巨人軍に入団し、レイテ島で戦死した投手・広瀬晋平の話があった。さっそく大商野球部の方にご協力をいただき、会場内にコーナーを設けた。その他、召集令状(赤紙)や戦時中の日記、軍事郵便、物の無い時代に節約のために使ったツギハギだらけの布切れ、旧八幡商業学校の軍事教練の資料など、随時、展示させていただいた。そのため、会期当初にお越しいただいた方の目にはとまらず、申し訳ないことをしたと反省している。

今回の企画展で「戦時下大津の三つの秘話」として下記の三つの話題を取り上げた。それは、①終戦間際に市内南部の東洋レーヨン(現東レ滋賀事業場)に落ちたパンブキン爆弾(原爆模擬爆弾)。これについてはパンブキン爆弾の実物大模型をエントランスホールに展示した(写真1)。②比叡山上に築かれた、幻の桜花特攻基地。これについては、比叡山ケーブルに保存されていた生々しい写真や体験者からの証言を得た。③旧逢坂山トンネル内に設けられた軍需工場。これについては、トンネル内部の写真や、当時トンネル内で働かれていた京都府立女子専門学校(現京都府立大学)の方々の証言、それに、女専の方が軍需工場で作業に従事される前に訓練された青年学校での学習ノートも、活用させていただいた。以上の「三つの秘話」については、今後も継続的な調査を実施し、いずれ当館の「研究紀要」などで発表したいと考えている。

また展示室入口では、出征兵士の見送り風景の復元、室内では戦時中の家庭の居間を復元した(写真2)。



会期中の来館者は七二五〇名、そのうち、会期中無料とした小中学校の児童・生徒は合計で一八九名であった。来館者全体の内訳は、大津市内七一％（滋賀県下まで含めれば八五％）であった。世代別では、いわゆる団塊の世代以上（六〇歳以上）で三〇％、小中学生で一六・五％であった。また内容については、大変満足・満足を合わせると八二％と圧倒的に多かったが、不満・大変不満が一・二％と、数字的には極小であったものの、二七名の方がそのような感想を持たれた。その理由は、戦争の悲惨さや怖さが伝わってこない。そういった側面を若い人たちにアピールできていない、という点にあった。

今回の企画展では、先にも触れたように「銃後」の市民生活に重点を置き、戦地でのありさまについてはほとんど触れなかった。それは、平穏と思える今の生活が、知らないうちに戦争協力一色に染まっていくことの怖さ、小学生（国民学校児童）や若者たちの夢や希望を、戦争が奪ったことなどを、「銃後」の戦時資料をありのままに展示するなかで感じていただきたいと考えたからに他ならない。その点では、「今まで教科書でしか見なかった戦時資料に衝撃を受けた」、「今回の企画展は身近で、生活の中での戦争という観点で考えさせられる部分があった」という観覧者のご意見は、正直、担当者として胸を撫でおろすことができた。

ただ「米国側から見た戦争も合わせて展示できたら・・・」というご意見には、今後の課題を教えてくださいと感じている。その一方で、小学生からと思われる感想のなかに、「戦争で日本人が被害を受けたのでアメリカにあやまってほしい」という意見があったことは、担当者として大きな反省点となった。今回の企画展では、戦争の被害者が日本人以外にもあったという点について、一言もふれていなかった

たのである。早速、「戦争の犠牲者は日本人だけではない、世界の人々が同様に犠牲となった」ことを記し、会場内にパネルを掲示したが、会期半ばのことであり、この掲示を、どれだけの子供たちが目にしたか不明である。今後の大きな反省材料である。

先にも記したように、今回は省略させていただいた多くの方々からのご意見、ご感想については、機会を改めて公表したいと考えている。戦争体験者の方々の高齢化は進んでいる。おそらく、今の小生が、体験者から話しを聞ける最後の世代なのではないだろうか。これ以降は、「又聞き」の時代に入っていく。今こそが、戦争の実態を橋渡しする時期なのだと強く感じている。

（当館学芸員 樋爪 修）



（写真1）原爆模擬爆弾「ファットマン」の実物大模型



（写真2）戦時中の家庭の居間の復元